

ニューノーマル時代の北信越支部

日本雪氷学会北信越支部長 新潟大学災害・復興科学研究所 河島 克久

未だコロナ禍の収束のシナリオが見えない中で、北信越支部の皆様も様々なご苦労や戸惑いを抱えていらっしゃるのだと思います。コロナ禍によって私たちの社会は大きく変化し、以前と同じ姿に戻ることができないと言われていました。すなわち、私たちは心の準備をほとんどする間もなく、いきなり「ニューノーマル」の時代に突入してしまいました。新型コロナウイルス感染症の拡大は、研究や教育の現場にも大きな影響を与え続けています。研究面では、フィールドワークや実験の実施がままならないのに加えて、研究発表会・シンポジウムなどの開催による意見交換や情報発信も思うようにならない状況です。教育面では、非対面型授業(オンライン授業)が基本となり、実験・実習、インターンシップ、ゼミナール、演習、卒業論文などの授業科目は、徹底した感染症対策を講じたうえで何とか対面型授業ができてきているような状況です。

新型コロナウイルス感染症対策として、その有用性が認識されて急速に普及したのが Web 会議システムです。大学等での授業のみならず、学会の大会やシンポジウム、研究打合せ、会議など、教育研究の場でも今や利用しない日がほとんどないほどです。Web 会議システムの教育現場での活用は、時間的・空間的な制約を排した教育を展開でき、反転授業等の新しい教育方法の展開にもつながる可能性があると言われていました。また、研究面でも気軽に打ち合わせができたり、パソコン画面でクリアな資料を閲覧しながら研究発表を聴講できたりと、その効果は極めて大きいと言えます。しかし、オンラインで展開される教育研究活動に対して、「便利であればそれでいいのか?」、「何か失われているのではないか?」と感じている方もいらっしゃるような気がします。たぶん、それは、体感と対話のある学びの面白さや、社会とのつながりの中で行う研究の面白さといった点において、オンラインではカバーしきれないものを感じているからではないでしょうか。私たちがこれまで続けてきた「顔と顔を突き合わせての対話」にはそれなりの意味があるように思います。ゴリラ研究の第一人者である京都大学名誉教授の山際壽一先生(前京都大学総長)は、あるインタビューの中で『なぜフィールドに出ることが重要か、外部と交わることが重要かと言うと、人間は“出会う”ことで“気づき”を得る生き物だから。人間は他者の反応によって初めて自分を知り、新しい考え方を取り入れることができる。』と述べられています(「国立大学」第 59 号)。私たちも、これまで人との出会いの中で研究の面白さ・難しさに気づいてきました。また、社会や研究者コミュニティのダイレクトな反応を通して、自分の研究の問題点や間違いを受け入れてきました。人と人との出会いの場の重要性について私たちは今一度考え、必要であれば、ニューノーマルな次代を担う学生や若手研究者・技術者に、社会や研究者コミュニティとのつながりの中で行う研究の面白さを伝える努力をしていくべきであろうと考えます。

最後になりますが、上石勲前支部長の後を引き継ぎ、2021-2022 年度の北信越支部長を務めることになりました。北信越支部は私たちに最も身近な研究者コミュニティ形成の場です。当支部には様々な経験と実績を有する多分野の研究者・技術者がそろっています。ニューノーマル時代の支部の在り方と役割を皆さんとともに考え、設立 34 周年を迎える北信越支部の更なる発展につなげていきたいと思っております。支部会員の皆様からのご指導とご協力をよろしくお願いいたします。